

シリア・アラウィー派の特色と その支配の歴史的背景

(一社) 現代イスラム研究センター

理事長 宮田 律

シリアはウマイヤ朝（661～750年）の首都であったように、イスラム世界の中心であり続けてきたが、ローマ人、モンゴル、十字軍、トルコ人などの外敵の侵入も受けてきた。シリアの国土は肥沃な農地と山岳地帯、また砂漠によって主に構成されている。シリアには、クルド人、アルメニア人、アッシリア人、キリスト教徒、ドルーズ派、アラウィー派、シーア派アラブ人、またスンニ派アラブ人が居住している。アラブ・スンニ派が全人口の最多数派を占めているが、現在のシリアはアサド大統領がそうであるように、アラウィー派の少数支配の形態をとる。

現在あるシリア国家は1946年にフランスから独立したものである。しかし、独立後は安定とはほど遠く、国内で権力闘争が繰り返された。1963年にパン・アラブ主義のバース党が政権を掌握し、安定を見るようになったが、この党は宗派的にはアラウィー派主導によるもので、今日に至るまで政権を担っている。

シリアでアラウィー派の少数支配になった歴史的背景とは何か、またアラウィー派という宗派の特徴や性格について以下で述べ、シリア社会の特質を考えたいと思う。

アラウィー派の政権掌握過程とその宗派的特色

第二次世界大戦後のシリアの政治的動揺、また1950年代のエジプトのナセルが訴えるアラブ・ナショナリズムの高揚は、シリアをエジプトへの合

邦へと向かわせた。しかし、この合邦は長続きせず、1961年9月28日に軍事クーデターが発生すると、シリアはエジプトとの合邦が消滅し、シリア・アラブ共和国が設立された。この軍人による実権の掌握は、バース党主導によるものであった。

バース党員の軍人で、現在のバシヤール・アル・アサド大統領の父であるハーフェズ・アル・アサドは、1970年11月に無血クーデターで政権を獲得する。文民政党を政界から追放し、大統領に就任した。彼は、アラウィー派の出身であり、アラウィー派が政権の座に着くことは、ユダヤ人がロシアの皇帝に、また不可触賤民がインドのマハラジャとなるに等しいとも形容された。シリアでは長い年月にかけてアラウィー派の人々は最も貧しく、疎外されていたが、アサド政権になって、アラウィー派はシリア社会を支配するようになった。彼らは、軍の重要な地位を独占し、また多くの富を手収めるようになった。

アラウィー派は、イスラムの第4代カリフ（預言者ムハンマドの後継者）で、シーア派初代イマームのアリーへの尊敬を唱えるが、その意味ではシーア派信仰との通底が見られる。世界のアラウィー派の全人口は現在130万人と見られ、そのうちの100万人前後がシリアに住んでいると見積もられる。これはシリア全人口の12%を構成する数である。また、シリアのアラウィー派の4分の3がシリア北西のラタキア州に住んでいる。ラタキアではアラウィー派が全人口の実に3分の2を構成

する。

アラウィー派の起源は9世紀にまでさかのぼり、859年頃、イブン・ヌサイリーは自らが「バブ(真理に至る門)」であることを宣言する。イブン・ヌサイリーは、新たな教義を簡易な実践で普及させ、信徒を獲得していった。アラウィー派の信仰は、フェニキアの異端的宗派や、マズダク教、マニ教からも影響を受けているが、最も似ているのはキリスト教とされ、アラウィー派の宗教的儀礼では、キリスト教と同様にパンとワインを用いる。他方で、イスラムの4代目カリフのアリーを神の化身として考える。アラウィー派はムハンマド、アリー、サルマーン・アル・ファリースィー(ムハンマドによって解放された奴隷)を信仰の対象とし、また多くのキリスト教の行事を祝うが、その中にはクリスマス、新年、公現日、イースター、聖霊降臨祭、シュロの主日などが含まれている。さらに、セント・ジョージ、セント・バーバラ、セント・キャサリンなどのキリスト教の聖人を崇める。

アラウィー派では、両親がアラウィー派教徒の男子のみがその教義を学ぶことができるとされている。これらの男子は16歳から20歳にかけて宗教的儀礼を習得し始め、その密儀は次第に教え込まれる。その密教性は厳格に守られ、教義を異教徒に漏らした者は死によって報いを受ける。女性には教義が教えられることはなく、女性は不浄であるとされて、宗教的儀礼からは排除される。女性は、ムスリム女性のように、ベールをして身を覆うことはない。

アラウィー派では、男たちが男色行為をするとともに、妻たちを共有するなどの説も流され、そうした噂がイスラム世界では定着し、またヨーロッパの一部でも流されるようになった。ムスリムの間のアラウィー派に関する伝承は、多くの場合正しくないが、アラウィー派がイスラム法であるシャリーアとは異なる、あるいはそれに反する行為をしていることは事実である。たとえば、アラ

ウィー派はイスラムの断食や喜捨、巡礼を行わず、特に巡礼は偶像崇拜とすら考えられる。

アラウィー派ではイスラムのモスクのような礼拝の場が存在なく、祈りの対象としては宗派の聖人の墓廟があり、また礼拝は宗教指導者などの個人の家で行われる。オスマン帝国時代にイスラムのように小規模なモスク(寺院)が政府によって建立されたこともあるが、アラウィー派の人々はこれを利用する姿勢を見せなかった。

アラウィー派は、イスラムとはまったく異なる宗教であるが、それでもなおアラウィー派はモスクを建立したり、一部にイスラム的な生活様式をとったりもしている。アラウィー派の宗教的信条にはシーア派の「タキーヤ」があり、「タキーヤ」は自らの信仰を隠すという考えである。

このタキーヤの考えに基づいて1950年代から60年代にかけてアラブ・ナショナリズムへの熱狂があった時は、シリアのアラウィー派はアラブのアイデンティティーを強調した。ハーフェズ・アル・アサドが政権を掌握する以前にダマスカスに住んでいた1万人余りのアラウィー派の人々はスンニ派であるかのように生活していた。自らがアラウィー派であることを名乗るようになるのは、ハーフェズ・アル・アサドが大統領に就任してからのことである。

シリア社会の対アラウィー派観

アラウィー派は、イスラムのスンニ派やシーア派からは蔑まれた存在であり続けた。たとえば、イスラムの思想家であるアブー・ハミド・アル・ガザーリー(1058~1111年)は、「アラウィー派は血、金、結婚、食肉処理においてイスラムから逸脱している。彼らを殺すことはムスリムの義務である」と述べている。

さらにイスラムの原点への回帰を唱えたシリア生まれの思想家アフマド・イブン・タイミーヤ(1268~1328年)は、アラウィー派を激しく非難し、教祖のヌサイリー族はユダヤ人やキリスト教

徒よりも不敬虔で、さらに彼らは戦争をひたすら行うフランク人やトルコ人やその他の異教徒よりもいっそう不敬虔であると断じた。

タイミーヤによれば、アラウィー派はアッラー、預言者、聖典クルアーンを信じないムスリムの血を流すことを欲するムスリムにとって最悪の敵である。イスラム法によってアラウィー派と戦い、彼らを罰することはムスリムにとって最も敬虔な行為で、重要な義務であるとタイミーヤは説いた。

アラウィー派は、オスマン帝国内の自治制度であるミッレト制度にとり込まれることもなかった。オスマン帝国が1571年に発した布告ではアラウィー派はムスリムが支払う以外の税を支払う義務があるとされた。というのも、アラウィー派はラマダンの断食も行わず、礼拝も行わず、イスラムの教義に従わない異教徒と判断されたからである。オスマン帝国下でスンニ派は、アラウィー派が生産する食料も不衛生と見なし、口にすることはなかった。

19世紀末になると、オスマン帝国にやって来たヨーロッパ諸国のキリスト教の伝道師たちはアラウィー派がムスリムでないことに注目するようになる。これに対して、オスマン帝国当局はアラウィー派の人々をイスラムに改宗させようとした。というのも、フランスがオスマン帝国内のカトリック教徒やマロン派教徒との結びつきを続々と確立していたからだ。オスマン帝国政府は、フランスがさらにアラウィー派との親密な関係を築くことを恐れるようになり、アラウィー派の地域にモスクや神学校を建立し、イスラムを教化するようになった。また、アラウィー派の聖職者たちにイスラムの宗教的慣行を採用するように圧力をかけたりもした。しかしながら、こうしたオスマン帝国政府の方針もアラウィー派に影響を及ぼすことがなく、そのイスラムへの改宗を実現することがなかった。

アラウィー派に対する虐殺は歴史上たびたび起こり、1317年には2万人が、また1516年にはその

半分の数の人々が殺害されたと伝えられている。こうした迫害のためにアラウィー派は、自らを限られた地理的範囲に閉じ込めて暮らしてきた。アラウィー派は、都市で生活する場合でも自らの信仰を隠すタキーヤを遵守してきた。彼らの圧倒的に多くは村落に住むものが多く、アラウィー派の教祖の名でもある「ヌサイリー」はシリア社会では農民の代名詞ともなっていた。迫害された歴史をもつアラウィー派であったが、他方で外部の者たちを襲撃することもあり、アラウィー派にはスンニ派の集落を襲い、租税の徴収をも拒む乱暴者というイメージもあった。

アラウィー派に社会的上昇の機会を与えたフランス統治

第一次世界大戦後のフランスによるシリアの委任統治はアラウィー派の地位を次第に上昇させることになる。アラウィー派は、1920年にフランスがダマスカスを占領すると、親フランスの姿勢を即座に見せるようになる。このアラウィー派の姿勢は、従来の差別から抜け出そうとする意識とともに、伝統的なタキーヤの意識の表出だったともいえる。

アラウィー派は、「アラブの反乱」を指導したファイサル・イブン・フサインがシリアを支配することに反対した。というのも、スンニ派アラブによる統治は彼らの虐げられた状態が続くと考えたからである。アラウィー派は、フランスの保護の下に自らの国家を建設することも意図するようになったが、他方フランスはアラウィー派の支持をとりつけるために、彼らに自治を付与した。フランス統治は、他のどのコミュニティーよりも特にアラウィー派に利益をもたらすものだった。1922年7月にラタキア自治国が成立し、アラウィー派の判事も誕生するようになった。こうしたアラウィー派の権利拡大にスンニ派は快く思わず、シリアに自治国制度が設けられたのは、アラウィー派の策動だともスンニ派の一部では考えられた。

アラウィー派は、フランス統治に協力し続け、1926年1月の総選挙では多くのシリア人がフランスに反発してボイコットする中でアラウィー派はその人口に見合わないほどの議席を獲得した。また、フランスが創設した「レヴァント特別部隊」の8個大隊の半分はアラウィー派の人間が占めるようになっていた。アラウィー派は、スンニ派のデモを解散させ、ストライキを解き、また反乱を鎮定した。アラウィー派は、フランス統治が終了すれば、スンニ派アラブの支配が復活すると考え、フランスに積極的に協力した。

1936年にアラウィー派が統治するラタキア自治国がシリアに併合されそうになると、スレイマン・アサド（ハーフェズ・アル・アサドの祖父とされる）などのアラウィー派の指導者たちはフランス首相のレオン・ブルムに手紙を書き、アラウィー派がスンニ派アラブとは宗教的に大きな相違があり、アラウィー派社会がシリア国家の一部になることへの反対を表明した。シリア国民となれば、アラウィー派はカーフィル（不敬虔）と見られ、「精神的な封建主義」に戻されてしまうことを懸念した。それゆえ、フランスにはアラウィー派の自由と独立を守らなければならない義務があるというのが彼らの考えであった。

ラタキアは1936年に自治を喪失したものの、アラウィー派に有利な行政・財政システムは残った。1939年に、アラウィー派のスレイマン・アル・ムルシードは5,000人のアラウィー派の人間を率いて、フランス製の武器を用いてスンニ派に対する武装蜂起を起こした。この反乱によって、ムルシードはダマスカスのスンニ派の政治的権威がラタキアのアラウィー派に及ぶことを防いだ。

しかし、1946年にシリアが独立した時にシリア政府をフランスから引き継いだのはスンニ派の都市のエリートたちだった。アラウィー派はスンニ派の統治を嫌い、スレイマン・ムルシードは1946年に2度目の反乱を起こしたが、失敗に終わり、彼は処刑された。さらに1952年にムルシードの息

子によって3度目の蜂起が発生したが、これも成功しなかった。アラウィー派の人々はラタキアがレバノンか、トランスヨルダン（現在のヨルダン）に編入されることを望んでいた。

しかし、アラウィー派の反乱やシリアからの分離要求は、スンニ派のアラウィー派に対する悪感情をさらに増幅させることになっていく。シリアの独立後、スンニ派の指導者たちはラタキアのシリアへの併合を意図するようになった。戦略的にもラタキアはシリアで唯一海洋に接する地域で、重要である。スンニ派支配層はラタキア自治国を廃止して、アラウィー部隊を解散させた。さらに、国会でのアラウィー派の議席を認めないなど、アラウィー派をシリア国家に同化させる方策をとっていった。

軍を通じてシリアの権力を掌握

シリアからの分離が困難になり、シリア国家にとどまることを決定すると、アラウィー派は軍隊とバアス党の中で権力を獲得しようと躍起となっていった。軍隊におけるアラウィー派の人員は独立後も減少することはなかった。フランス統治時代からのアラウィー派の将兵は残り、また新たに入隊して来る者たちもいた。

軍隊は、アラウィー派に社会的上昇と経済機会を与える場であったし、両大戦期、民族感情を強くもっていたスンニ派アラブ人たちはフランスに協力することを嫌がり、その軍に入ることを拒絶したり、躊躇したりした。アラウィー派など少数派は貧しいために、子弟の教育のために授業料が無料の陸軍士官学校に好んで入校していった。また、家族の生活を支えるためにも軍隊に入って俸給を得ることが必要だった。

1946年後もアラウィー派の人物がシリア軍の将校に占める割合は多かった。1949年には重要な軍の部隊すべてにアラウィー派の将校たちが配置されるようになっていた。アラウィー派の兵士たちが多数を占め、また下士官のうち実に3分の2を

アラウィー派が占めるほど、アラウィー派の軍隊における存在は絶対的なものになっていく。

スンニ派のアラブ人たちは軍の幹部職を占めれば、軍隊をコントロールするのに十分と考えていた。アラウィー派の軍人たちは中隊長レベルよりも上位の階級に昇任することができなかったが、スンニ派のアラブ人たち同士の権力争いによるクーデターが1949年から63年の間に繰り返し発生したことが、アラウィー派に権力獲得のチャンスを与えていった。アラウィー派の軍人たちは、スンニ派の権力闘争の外にあって、次第に力を蓄え、失脚したスンニ派の軍幹部のポストにアラウィー派が代わって就くようになる。軍幹部たちになったアラウィー派がアラウィー派の人物たちを重用することによっても、アラウィー派が軍内部で次第に勢力を伸張させていくことになった。スンニ派の軍人たちは個人主義で、自己の利益を優先させたが、アラウィー派の将兵たちは宗派の利益を重視していた。

また、アラウィー派はバアス党の組織を通じても権力を獲得していった。党勢を拡大するためのバアス党の方針は、地方の少数派のコミュニティーの支持を集めることに重点が置かれた。社会・経済的平等を説き、社会主義的に方向づけられたバアス党のイデオロギーは貧困にさいなまれるアラウィー派の共感を得るものだった。地方出身でダマスカスやアレppoなど都市に移住していった者たちがバアス党員の多数派を構成するようになる。アレppoの一つの高等学校の生徒たち4分の3がバアス党員ということもあった。バアス党の創設時の指導者の一人であるザキ・アル・アルズブイーがアラウィー派出身であったように、バアス党の中でもアラウィー派は頭角を現していった。

また、バアス党のイデオロギーの二つの柱である「社会主義」「世俗主義」もムスリムからは異端視、蔑視されてきたアラウィー派にとっては都合がよいものだった。社会主義はシリアの中では最

も貧しいアラウィー派に経済的平等の機会を与えるように響き、また世俗主義はアラウィー派に対する偏見を和らげる印象を与えた。実際、これらのイデオロギーは、1950年代から60年代にかけてアラブ世界を席卷していたアラブ・ナショナリズムよりもアラウィー派にとっては魅力があるものだった。

アラウィー派主導のシリアはどこに？

中東地域のマイノリティで、独特の教義をもつアラウィー派による支配があるのはシリアだけであり、その意味では現在のシリアの政治体制はユニークなものといえる。

シリアで昨年、反体制運動が明白な形で現れてから9,000人以上の人々が犠牲になったと見積もられている。シリアには65万人の正規軍がいて、アサド体制を支え、その堅固な権力基盤となっている。その軍を支えるのがアラウィー派の軍人たちである。軍の体制からの離反もなく、またシリアのアサド政権はカダフィ大佐のリビアとは異なって各国に駐在する大使も体制を支持する姿勢を維持している。アラウィー派中心の体制は力によって現在の政治危機を乗り越えようとしているが、それはハーフェズ・アル・アサド前大統領が1982年にムスリム同胞団のハマーでの蜂起を軍事的に制圧して体制の維持を図った「教訓」に学んでいるかのようだ。

シリアは本稿で見てきたアラウィー派による独裁政権といわれるが、首相、国防相、外相、大統領首席補佐官がスンニ派であるように、体制によって恩恵を受けるスンニ派勢力によってもアサド政権は支えられている。シリアの体制が動揺していることは、アサド政権と良好な関係を保ってきたレバノンのヒズボラ（神の党）とイランに危惧を与え、またイスラエルも安全保障上の関心から注視し続けている。マイノリティのアラウィー派主導のアサド体制の動静が中東地域情勢に少なからぬ影響を与えることはいうまでもなからう。